

英語教育史重要文献集成第13巻：英語通信教育

Collection of Significant Literature on the History of English Education Vol.13: English Distance Education

江利川春雄監修・解題 / 2019 ゆまに書房

ERIKAWA Haruo Ed. / 2019 Yumani Shobou

宮添 輝美 MIYAZOE, Terumi

● 東京理科大学：教養教育研究院

Tokyo University of Science: Institute of Arts and Sciences

『英語教育史重要文献集成』全15巻は2017年9月（第一期）、2018年11月（第二期）、2019年11月（第三期）の三期に亘り5巻ずつ刊行されている。本シリーズは明治期～太平洋戦争直後頃までに出版された、英語教育史にとって重要かつ稀少な資料を復刻収録する。江利川春雄氏（和歌山大学教育学部名誉教授・前日本英語教育史学会会長）が全巻を編纂し、また、各巻末には収録資料の歴史的意義を解説し、併せて主要な参考・関連文献を紹介する「解題」が付録している。

ここに紹介するのは、全15巻のうち2019年末に「英語通信教育」に関する稀少文献を復刻した第13巻である。本巻の装丁は、収録文献の性質からして続き番号での頁構成にはなっていない。全体の厚みが約32ミリで大半は復刻資料が占め、巻末の「解題」は全24頁である。第13巻には、以下に列挙する一次資料（当時に刊行された原資料）計11篇が収録されている。1～11の番号は、本稿での便宜のため、筆者が付した。

1. 大日本英語学会一覧（1898）
2. イーストレーキ英語学会一覧（1901）

3. 新式英語通信教授：学則一覧（1912）
4. 大日本英語通信学校学制一覧：教授録見本（1914）
5. 研究社英語通信講座：附入学案内（1928）
6. 英語通信社之教授一班（会則）（1930）
7. 井上英語講義録：新学期内容見本（1937）
8. 欧文社通信添削会：内容紹介（1942）
9. 日本英語教育協会の英語通信教育案内（1952）
10. 井上英語通信講座：入学案内（1953）
11. 実用英語講座：入会規定・内容見本（1928）

これら11篇は、いずれも選定された単科型英語通信教育の学則一覧や入学案内であり、プログラムの運営法や科目構成、講師名簿や在学生・卒業生からの投稿等を通じて、当時の英語通信教育の様子を生き生きと伝えている。従来、明治期以降の外国語教育は一部エリートの専有物との印象があるかもしれないが、通信教育という学習手段を通じて、向学心に燃え、日本の近代化を足元から支えた数多の一般市民が〈正規の〉教育機関と並行して通信により学んでいた様子を、これらの資料を通じて知ることができる。この意味で本巻

はまさしく「通信教育による〈知られざる英語学習史〉の軌跡」(p.1)を物語っていると言える。

先に列挙の11篇の順序は、本巻への収録順序に従い転記したもので、史実における各通信教育課程の開始時期とは、必ずしも一致していない。また、各資料名の後ろに記載された括弧内の西暦は、各資料の奥付等に示された発行年である。本巻が発行年をもとに整理されているのは、恐らく、これらの資料の多くがこの一点しか現存を確認できないほど稀少なものであることに困っている。最後の一篇(資料11)が時系列になっていない(1953年の後に1928年の資料を収録している)が、それは恐らく、最後の一篇のみ全頁を通じて左開きであり、頁番号が左から右に打たれているためである。他の10篇の多くは右開き、あるいは入学案内(右開き)とテキスト見本(左開き)が合わさり一冊仕立てになっているものもある。右開きか左開きかは、使用言語が縦書きか横書きかの慣習や合理性にも関係し、とりわけ本巻の主眼が英語通信教育、すなわち横書き左開き文化の日本への浸透・普及を史実する資料であることを考えると、当時の日本語を主体とする出版慣行との妥協点を様々に模索する半世紀を物語る文献集としても、本巻は極めて興味深い。

一次資料の復刻とともに重要であるのは、編者江利川氏による巻末の「解題」である。「解題」によれば、今日の研究社の源流が1900年(明治33年)発行の「英語科講義録」(p.10)に遡ること、また、今日の(株)旺文社や(財)日本英語教育協会の設立者は共に赤尾好夫氏であり、同氏はこれら二社の設立に先立ち1931年(昭和6年)に旺文社通信添削会を設立していることを知る。井上十吉と言えば、筆者がまず思い起こすのは、約一世紀前になされた偉業『井上英和英大辞典』(1915年、大正4年)や『井上和英大辞典』(1921年、大正10年)であるが、本巻「解題」では井上氏の最初期の著作として、英語通信教育のテキストである『英語学講義録』(1897年、明治30年)が挙げられている。いずれも明治時代中期に〈非正規〉に行われていた英語通信教育が、現代における英語教育を支える根幹に生き続けている証である。

収録資料の学術的価値もさることながら、これらの一次資料は、当時の社会文化を伝える読み物として、面白い。筆者の個人的な関心事となろうが、例えば、『井上英語講義録 新学期内容見本』(資料7)には、同校の名誉顧問である加納治五郎氏による推薦の辞「オリンピックを迎えんとして」が同氏の肖像写真とともに掲載されている。曰く、

云うまでもなく、オリンピック大会には、全世界から東京を、日本を目指して参集してくるのである。日本国民の全体が、世界の人々から試験されるようなものである。これらの人に応接し、意思を通じるには、勿論、英語以外にない。(中略)オリンピック大会の主催国たる日本国民が、世界共通語たる英語が話せないと言ふ事は、大にしてまさに国辱であり、小にしては、その人の将来を殺してしまうものと言えよう。(中略)一人でも来って多くの人が、英語を学ばれんことを祈っている。

(適宜、現代語表記に変え引用)

今から約80年前の言である。

加納治五郎といえば、日中戦争により返上となった幻の1940年東京オリンピック・招致委員会委員長であり日本の「柔道の父」であることは、1912年(明治45年)ストックホルム・オリンピックでマラソン選手として日本からオリンピックに初出場した金栗四三をモデルとする2019年放映のNHK大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック噺(ばなし)〜」を通じて、記憶に新しい方もおられよう。『日本英語協会の英語通信教育案内』(資料9)には英語教育の最新ツールとして、今では博物館の展示品としてしか見ることができなくなってしまった蓄音機やレコードが紹介されており、本巻収録の一次資料は、英語通信教育のみならず言語教育に不可欠な視聴覚教材や英語教授法の歴史を明かす資料としても、読み応えがある。

これらの一次資料にも勝り、筆者が本巻をここに紹介すべき一書と考える今一つの理由が、巻末「解題」にまとめられた「表一 英語通信教育史略年表」(pp.3-4)にある。本年表は1885年(明

治18年)～1950年(昭和25年)に亘る英語通信教育史の動向を簡潔に要約しており、明治中期～戦後まで65年に及ぶ英語通信教育史の主要イベントを一望することができる。さらなる展開については、本誌Vol.64に別掲の拙稿(“Unveiling the History of Distance Education in English Education: Japan 1885-1950”)も参照いただければと願うが、「英語通信教育史略年表」のかたちで英語通信教育史の大枠が完成したことで、このたたき台の上に細論の検証研究へと歩を進めることができるようになった学術的意義は、計り知れない。

筆者も研究課題の一つとして高等教育の礎をなした1880～1930年代の通信教育についての研究をライフワークとしてきた研究者の一人である。この過程で、英語通信教育に関する一次資料も少しずつではあるが集めている。このジャンルでの現存資料の収集を実際に自らの手で行ったことのある者ならば、本巻収録の資料が「日本の英語教育史において欠くことのできない重要文献のうち、特に今日的な示唆に富むものを精選して復刻したものである。いずれも国会図書館デジタルコレクションで一般公開されておらず、復刻版もなく、所蔵する図書館も皆無ないし僅少で、閲覧が困難な文献」(本巻、「凡例」より)であることを、俄かに感知できぬはずはない。

日本における英語通信教育を一つの研究分野として画定する偉業を成しえた江利川春雄氏に対し敬意を改めてここに表し、本稿の結びとしたい。

付記

本稿で紹介の第13巻のシリーズにおける位置づけを示す参考として、15巻全体の様子を以下に記す。各巻15,000～20,000円の価格帯となっており、個人ではなく図書館等にての全巻所蔵閲覧が望まれる。

英語教育史重要文献集成 第I期

第1巻 小学校英語

第2巻 英語教授法1

第3巻 英語教授法2

第4巻 英語教授法3

第5巻 英語教育史研究

英語教育史重要文献集成 第II期

第6巻 英語学習法1

第7巻 英語学習法2

第8巻 英語教員講習1

第9巻 英語教員講習2

第10巻 英学史研究

英語教育史重要文献集成 第III期

第11巻 英語教育論1

第12巻 英語教育論2

第13巻 英語通信教育

第14巻 戦時下の英語

第15巻 敗戦・占領下の英語